

## 神奈川

フランス・パリに倣い、「ウエーターズレース」で街の活性化を目指す試みが、横浜でスタートした。仕掛け人は、30年ほど前にパリのレースに出場した体験を持つ横浜中華街発展会協同組合副理事長の梶恒扇<sup>つねお</sup>さん。梶さんが委員長を務める実行委員会は、昨年開催した日本初の公認レースを、今年は1.5倍の規模に拡大。再来年以降、できるだけ早く地区予選を開いて面的な広がりを持たせ、優勝者を毎年パリへ送り込んで「他流試合」をすることを計画している。

11月25日、イチョウ並木が黄色く色づいた横浜市中区の日本大通りに、場違いな声援が飛び交った。ウエーターの正装をまとった75人の選手が、ビール瓶とグラスを載せたトレーを手に往復150メートルのコースを疾走する。コーナリングで失敗する選手が続出。最大の見せ場・団体レースでは、ダントツのトップだった崎陽軒(同市西区)が瓶を落として割り、失格になるアクシデントに救われて、横浜ロイヤルパークホテル(同)が連覇を果たした。

同市内の主だったホテルはこの日に向けて、料飲部門から足の速そうな選手を選抜して練習を重ねてきた。ロイヤルパークや、昨年惜しくも優勝を逃したパンパシフィック横浜ベイホテル東急(同市西区)は、在京テレビ局の情報番組の事前取材まで受け入れて、全社的な盛り上げを図った。これに刺激され、開業85周年の老舗であるホテルニューグランド(同市中区)も今年から参戦した。わずか2年で5千人(主催者発表)を越す観客が詰めかけるイベントに急成長していることから、選手たちも「走りがある」と張り切っていた。

ウエーターズレースはウエーターの地位を高め、士気を向上させる目的で、20世紀初頭にパリで始まった。着順のほか、身のこなしの優雅さも採点対象とされるので、店にとっては格好の宣伝材料になる。本場のレースは「パリの華」といわれるほど名声が高く、街の活性化や地域経済の振興にも大きな貢献をしている。



イチョウ並木の下で繰り広げられたウエーターズレースの熱戦(11月25日、横浜市中区の日本大通り)



パリの第50回大会に出場した時の梶さん(中央)

## 発祥の地・パリに“追いつけ” 「ウエーターズレース」で街を活性化

フランスに本部を置く「ジ・インターナショナル・ウエーターズレース・コミュニティ」の公認レースは、60カ国以上で合計約720レースが開催されている。日本では、昨年からはじめた横浜が第一号。ウエーターズレース横浜実行委員会の委員長を務める梶さんは1984年、パリで開かれた第50回大会に日本人として初めて出場した。

同大会は一人で8.1キロを走る過酷なレースで、約320人の参加者のうち完走したのは120人足らず。梶さんは初参加にもかかわらず52位になり、現地の新聞にも大きく取り上げられた。その後、出場機会はなかったが、「日本でもレースを定着させ、自分が育てたウエーターをパリで優勝させたい」という夢を持ち続けた。

ウエーターズレース横浜の出場者は、昨年の約50人(うち団体の部は4団体、合計20人)から今年は約75人(同8団体、合計40人)に増えた。実行委員会は、再来年以降、できるだけ早く、みなとみらい21・中華街・元町などで地区予選を開いて面的な広がりを持たせ、参加者が合計千人を越す大会を目指す方針。そして、総合優勝者を毎年パリへ送り込んで、梶さんが果たせなかった「本場での優勝」を実現する計画を立てている。